第四幕

登場人物：
ロビン
マルレーン
ママ
パパ

台所から大きなネズの木が見える家。
大きな箱の中からママがリンゴを取り出し、
マルレーンに手渡す。

ママ　「はい、今日のおやつ」
マルレーン　「わぁい、リンゴぉ」
口をいっぱいに開けてかぶりつく、可愛い音。
マルレーン　「うふふ、美味し」
ママ　「あんたは本当に可愛い子」
愛おしそうにマルレーンの頭を撫でる。
しゃくしゃくとリンゴを食べていたマルレーンが
不意に動きを止めてママを見上げる。

マルレーン　「ねえ、ママ」
ママ　「何？」
マルレーン　「後でロビンお兄ちゃんも、リンゴ食べて良いよね？」
内心で舌打ちするママ、白々しく。
ママ　「あら、ロビンはリンゴは嫌いじゃなかったかしら」
少し考え込むマルレーン。
マルレーン　「ん……そんな事、ないと思う。
だって、『良いな』って言ったもん」
回想に繋ぐため、二行目は余韻を持たせた口調で。

〜回想〜
回想前と同じようにマルレーンがリンゴを頬張っている。
それを羨ましそうに見ているロビン。

マルレーン　「んん？」
ロビン　「……良いな」
マルレーン　「お兄ちゃんも食べる？」
齧りかけのリンゴを差し出すマルレーン。
慌てて首を振り目を逸らすロビン。
ロビン　「べ、別に、いらない」
マルレーン　「どうして？」
ロビン　「……お前のおやつを奪ったら、ママに怒られる」
きょとんとするマルレーン。
マルレーン　「奪るんじゃないよ？　マルレーンがあげるのに」
本音では欲しいが、我慢して。
少し未練を滲ませながらも拒否。
ロビン　「っ、それでも、駄目なものは駄目！」
マルレーン　「変なお兄ちゃん……。
（ずっとリンゴ見てたのに。
マルレーンの、気のせい？）」
〜回想・了〜

話を聞いて考え込むママ。
邪魔なロビンを殺してしまう方法が頭の中で閃く。
マルレーン　「ママ……ママ？」
妄想の世界からカムバックして。
マルレーン　「どうしたの、ママ？」
ママ　「あ……、あら、何だったかしら」
マルレーン　「だからね、ロビンお兄ちゃんにも
リンゴをあげて欲しいなって。
そしたらマルレーンも嬉しいなって」

この『だからね』は『だーかーらー！』ではなく、
こういう理由（回想の内容）『だから』リンゴを～
というニュアンスで、お願い風に。

ママ　「ええ、分かったわ。
　ロビンが帰ってきたら、そうしましょう」

二行目は黒く、優しげな声音でなおかつどす黒く。
可愛い娘と接する際の優しさ、
プラス邪魔者を始末できる事への愉悦。（↑重要）

マルレーン　「わぁい、ありがと、ママ！」

ママ　「それじゃあ、マルレーン。
　あんたはお茶にしましょう、こっちへいらっしゃい」

マルレーン　「はぁい」

ぱたぱた、駆け寄るマルレーンと一緒にキッチンへ。

ママ　「バレリアン、ラベンダーにマージョラム」

全て催眠作用のあるハーブの名前。
魔法を唱えるような口調で列挙していく。
これからハーブティーでマルレーンを眠らせるつもり。

マルレーン　「？」

ママ　「あんたは本当、可愛い子」

『ロビンを殺す良いアイデアを与えてくれてありがとう
と心の中で付け加えるくらいの気持ちで。
ママの無意識では『良い子』＝都合の良い子でもある。

～場面転換～

第三幕で帰宅を促されたロビンが家に帰ってくる。
ママの顔色を窺うように恐々とした様子で。

ロビン　「ただいま……」

ママ　「お帰り、ロビン。遅かったわね。
　マルレーンは待ちくたびれてお昼寝中よ」

ロビン　「ママ。その……」
ディッシュとスプーンの事を言い出せずまごつくロビン。
ママ　「どうしたの？　早く入ってらっしゃいな」
出迎えるように戸口の方へ歩み寄るママ。
普段はそんな事はしないので、ロビンは更に戸惑う。
ロビン　「……お皿と、お匙。見付からなくて」
ママ　「まあ、そんな事気にしてたの？
良いのよ、今朝は酷い事を言ってごめんね」
猫撫で声のママ、不審そうに顔色を窺うロビン。
ロビン　「ママ……？」
ママ　「それよりも、お腹が空いたんじゃない？」
ロビン　「う、うん」
ママ　「よく熟れたリンゴがあるわよ」
ロビン　「え、食べて良いの？」
ママ　「駄目だったら言わないわよ。なぁに、いらないの？」
ロビン　「ううん、欲しい！」
ママ　「なら、そこの箱に入ってるわ。
自分で好きなのをお取りなさい」
人が一人くらい入りそうな大きな木箱を指差す。
小走りに駆け寄り箱を開けるロビン。
蓋を開けた瞬間リンゴの香りが漂い思わず感嘆する。
ロビン　「わぁ、良い香り……。本当に、どれでも良いの？」
ママ　「勿論よ」
ロビン　「えっと、それじゃあ……どれにしようかな。
皆、綺麗で美味しそうだし。大きいのが良いな。
んっと……」
ごそごそ、リンゴに手を伸ばそうと箱に頭を突っ込む。
その背後に近付き蓋に手をかけるママ。
ロビン　「うん！　これが良」
ばたん！

ママが思い切り箱の蓋を閉め、挟まったロビンの首は
ギロチンのように切断され箱の中へ転がり落ちる。
ごっとん、箱の中でくぐもった音。
更にロビンの体が床に倒れる音、そして静寂。

ママ　「……ふ、うふふ、あはははは。馬鹿な子！
何てお馬鹿さんなの！　こんなに上手くいくなんて。
あぁっと、声が大きいわ。
マルレーンが起きてしまう」

ママ　声のトーンを落としリンゴ箱を開ける。
「さあ、どうしようかしら。
流石にマルレーンやあの人には
私が殺したと言う訳にはいかないし。
……そうね、こうしましょう」

〜場面転換〜

マルレーンが目をこすりながら子供部屋から出てくる。

マルレーン　「ふあぁ、ママぁ？　あ、ロビンお兄ちゃん！」
ロビンが食卓に座っているのを見て嬉しそうに駆け寄る。
ロビンの首には包帯が巻かれ、胴体と頭を繋いでいる。

マルレーン　「お帰り、お兄ちゃん。お腹空いてない？
ママがリンゴ食べて良いって……お兄ちゃん？
お寝んねしてるの？　それならベッドに……」
反応がないのを訝しみゆさゆさと袖を掴んで揺さ振る。
するとロビンの首に巻いてあった包帯が解け、
ロビンの頭が床に落ちる、ごっとん。

マルレーン　「ひっ……え、ぅ、あ……」
ごろごろ転がるロビンの頭と、倒れ掛かってくる体。
一気にパニックになって火が点いたように泣き出す。

マルレーン　「う、あぁぁぁん、うわぁぁぁん、ママ、ママーッ！」

ママ　「どうしたの、マルレーン！」
台所の奥から待ち構えていたように飛び出してくるママ。
マルレーン　「お、お兄ちゃんの、頭が、っ、頭が……。
うえぇぇん、おち、落ちちゃったぁ！」
ママ　「嗚呼！　それは怖かったわね。
大丈夫よ、ママがいるから大丈夫」
泣きじゃくるマルレーンを抱き締めてあやすママ。
自分のした事が受け入れられずがたがた震えて。
マルレーン　「どうしよう、お兄ちゃん、死んじゃった……？
マルレーンが殺したの？」
ママ　「あんたは悪くないわ。泣かないで。
ロビンの事はママが何とかしてあげる」
マルレーン　「ほんと……？」
マルレーンはママがロビンを治してくれるかも、
という期待を抱くくらいには幼くて純粋。
涙をいっぱい溜めて縋るような目でママを見上げる。
ママ　「ええ、だからここはママに任せて。
でも、一つだけ約束をしてちょうだい」
マルレーン　「何、ママ？」
ママ　「今からママがする事は誰にも内緒。
二人だけの秘密よ、良い？」
マルレーン　「うん、約束する……。
だから、ロビンお兄ちゃんを……（助けて）」
『助けて』の部分はママには聞こえない。

〜場面転換〜

パパが仕事から帰ってきた後、食卓にて。
ママがシチューの皿を運んできてパパの前に置く。
ママ　「はい、あなた。今日のシチューは特別製よ」

パパ　「おお、良い匂いじゃないか。
　何かスパイスでも使ったのかい」
ママ　「それは秘密」
　一口すくって口に運ぶ。
パパ　「うん、美味い！　こりゃ絶品だ」
ママ　「良かった、あなたのお口に合って」
　美味しそうに手を止めず話すパパ。
パパ　「そういえば、子供達はどうした？
　二人とも寝てしまったのかい」
ママ　「ええ、もうすっかりおねむで」
　子供の顔を見る事ができず少し残念そうなパパ。
パパ　「そうか。いや、寝る子は育つ、良い事だ」
　こっそり起きて食卓の下にもぐり込んでいたマルレーン。
　泣き声を殺しながら、食卓の下に散らばっている
　ロビンの骨を拾い集めている。
　ここからはマルレーンに視点を合わせる。
　パパとママの会話は少し遠く、卓一枚隔てている風に。
マルレーン　「ロビンお兄ちゃん、ごめんなさい。
　でもね、でもね、内緒だから言えないの」
パパ　「それにしても、これは何の肉だい？
　鳥かな、いや鳥にしては大きいな」
ママ　「そうね、鳥でも間違いではないかしら」
パパ　「はは、何だいそれは。おかしな動物だな」
マルレーン　「♪My father is eating（マイ ファーザー イズ イーティング）
　my brother（マイ ブラザー）,
　I sit under the table（アイ シット アンダー ザ テーブル）,
　Picking up bury them（ピッキング アップ ベリー ゼム）……」
　『My Mother Has Killed Me』の歌の主語を変えたもの。
　小さな声で呟きながら、段々歌詞に違和感を覚え始める。
　以下パパとママの台詞は→のマルレーンの歌にかぶる。

パパ　「おや、テーブルの下に何かあるぞ？」
ママ　「あら、気の所為よ」
パパ　「いやいや、お前は案外そそっかしいから。
箒（ほうき）で何かを掃き込んだのかもしれないぞ」
マルレーン　「この歌、何だっけ。何かが違う」
ここからマルレーンの歌詞が正しいものに変わる。
それと同時に、マルレーンの声にロビンの声が重なる。
演出的なものなのでキャラクターには聞こえていない。
マルレーンについては本当の歌詞をロビンに
つられて口にしているような風味があっても良し。
ここだけしんと、周囲の音が消える。
ロビンは恨み、悲しみが滲む声音にエコーを加えて。
兄妹　「「♪My father is eating me,（マイ ファーザー イズ イーティング ミー）
My sister sit under the table, picking up bury them under the cold marble stones」」
（マイ シスター シット アンダー ザ テーブル ピッキング アップ ベリー ゼム アンダー ザ コールド マーブル ストーンズ）
ママ　「ご飯中によしてちょうだいな」
パパ　「うん？　何だか大きいぞ、猫でもいるんじゃないか」
ママ　「あなた！」
マルレーンに気付きテーブルクロスを捲り上げるパパ。
兄妹　「「♪My mother has killed me」」（マイ マザー ハズ キルド ミー）
ぴたり、歌が止まる。
食卓の下を覗き込んだパパ。
目を腫らしたマルレーンと目が合って固まる。
マルレーンの手の中にはロビンの骨。
ママは険しい表情で黙り込む。
重い空気の中、戸惑いながらパパが口を開く。
パパ　「マルレーン、そこで何をしてるんだい？」
マルレーンは沈黙、ロビンだけが歌詞を繰り返す。

マルレーン　「……」

ロビン　「♪My mother has killed me,」（マイ マザー ハズ キルド ミー）

つられるように、マルレーンも次の歌詞を口にする。

兄妹　「♪My father is eating me」（マイ ファーザー イズ イーティング ミー）

パパ　「……マルレーン？」

呆気にとられるパパ。

事情がバレたかどうかはリスナーには有耶無耶のまま。

解説：

『My Mother Has Killed Me』という歌にちなむ。

ただし、ここから後の展開はこの歌の元となった

グリム童話の『ネズの木』にストーリーを寄せるため、

歌とは異なる筋書きになる。